長谷川陽子 × ベートーヴェン チェロ・ソナタ 全曲演奏会

ピアノ 松本和将

ベートーヴェンへの憧れを 聴衆と共有しながら追求する 意欲的演奏会

■ ベートーヴェン：チェロ・ソナタ
第１番 ヘ長調、第２番 ト長調、第４番 ハ長調、第３番 イ長調、第５番 ニ長調

'23/ 5/19 〈金〉 18:30 兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール
（開演時刻にご注意ください）

5000円 ／ 大阪新音会員 4500円（全席座席指定）

お申込み お問合せ **大阪新音・神戸新音**（共催） 大阪市北区西天満 4-6-14 イーデザインビル201 ☎ 06-6926-4888

●チケットは次でも取り扱っています…… 芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255（月曜休館）／電子チケットぴあ_
https://t.pia.jp（Pコード 226-548）／ ローソンチケット https://l-tike.com（Lコード 53281）／e＋ https://eplus.jp/

ベートーヴェンの音楽は人を励まし勇気を与える

日本を代表するチェリスト、長谷川陽子さんの演奏会が大阪新音で5年ぶりに実現します。しかもプログラムはベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲です。ご自身のデビュー35周年（2022年）記念ということですが、選曲の背景には、新型コロナウイルス感染の急拡大で演奏機会がほとんど無くなり、滅入っていた長谷川さんを元気づけ、再びチェロに向かわせてくれたのがベートーヴェンの音楽だったというエピソードがありました。

インタビュー

長谷川　陽子さん

長谷川さんは2022年、デビュー35周年記念としてベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲演奏会を東京で開き、CDもリリースされました。大阪でも23年5月に、演奏をお願いすることになりました。

「私、ベートーヴェンのチェロ・ソナタ全5曲を一気に演奏するのは、初めてなんです。5曲それぞれに演奏する機会はありましたが、『全曲演奏会』というのは初めて…」

これまでにブラームスのチェロ・ソナタやバッハの無伴奏チェロ組曲の全曲演奏を行っていらっしゃるので、ベートーヴェンのソナタの全曲演奏もご経験かと。

「ベートーヴェンって、やっぱり近寄りがたい存在ですので、全5曲を演奏するからには全体をどのように表現するか明確にしなくてはいけない。しかし、それが描ききれず、（全曲演奏は）まだ早い、まだ早いと先送りしてきました。かつて、レコード会社から『ベートーヴェンのソナタの全曲録音をしませんか』とご提案いただいたこともあるのですが、その時もやはり『まだ弾けません』とお断りしました」

コロナ禍が転機に

それが、このたびの35周年を機に全曲演奏会開催とCDリリースに踏み切られた。

「2020年に、コロナ禍でコンサートが軒並み中止になったことがきっかけです。それまでは私、お仕事をいただくままに、当たり前のようにチェロを弾いてきましたが、急に演奏機会が無くなり、なんだかポッカリと穴が空いてしまったようになったのです。一時は楽器ケースの蓋を開けるのも億劫でした。『もう弾かなくていいよ』と言われているような、モヤモヤした気分に陥って…」

「ところが、コロナ禍が一時的に落ち着いたとき、いろいろな作曲家のチェロの名曲を集めたコンサートの企画がもちあがり、演奏をお引き受けしました。プログラムにはベートーヴェン作品も挙がっていました。そこで練習を始め、ベートーヴェンの作品に向き合っていると、自分はコンサートの有無にかかわらず、チェロを弾き続けなきゃいけないと思うようになったのです。ベートーヴェンに鼓舞されました」

そこで、先送りしてきたベートーヴェンのソナタ全曲演奏に挑もうと決意された訳ですね。

「ベートーヴェンの作品には、どの曲にも希望が込められています。ご存じのように、ベートーヴェンはいろいろな苦悩に見舞われたけれど、それでも人間には希望があると信じました。それがベートーヴェンの創作のモチベーションになり、作品に普遍性をもたらしていると思います。ですからベートーヴェンの音楽は多くの人々を励まし、勇気を与えることができるのです。コロナ禍で多くの方々が落ち込んでいらっしゃるこの時期、私は、私を鼓舞してくれたベートーヴェンを演奏し、皆さまにお届けしたいという思いを強くしていきました。そして、ちょうどデビュー35周年を迎えるので、その記念にもしようと、全曲演奏会とCD録音を企画しました」

「この企画は、松本和将さんというすばらしいピアニストに演奏パートナーになっていただいたこと、そのほか多くの皆さまのご協力で実現できました。さまざまな『機』が一致したたまものと言えるかと思います」

作曲者の生きざまを映す

ベートーヴェンのチェロ・ソナタには、どんな魅力を感じていらっしゃいますか。

「ベートーヴェンのチェロ・ソナタって、たった5曲なんです。でも5曲それぞれに特徴があります。第1番・2番は20代半ばの作曲で若々しい。『チェロ・ソナタというより、チェロの伴奏付きピアノ・ソナタ』と評されます。でも私はチェロを前面に押し立てて演奏しますが…。そして第3番は『傑作の森』と言われる30代後半の時期に書かれた、ベートーヴェンの全作品の中でも傑作の一つです。3番でチェロの扱いがまったく変わりました、そして第4番・5番は40代半ばの作品です。この頃、ベートーヴェンはすでに聴覚を失い体調もおもわしくなく、生活も困窮していました。それでも苦しみに打ち克ち、後期の傑作群を産み出します。その『後期の入口』と言われるのがチェロ・ソナタ第5番です。このように、たった5曲ながら、ベートーヴェンの作曲家人生を映していて、魅力が尽きません。弾き手はもちろん、お聴きいただく皆さまにも聴き応えがある作品群です」

さらに豊かな演奏目指す

全曲演奏会は、すでに東京で行われましたが（22年5月）、手応えはいかがでしたか。

「デビュー35周年記念ということもあって、皆さま、高い評価をくださいました。私も手応えを感じているのですが、でも、やっとスタート地点に立ったという気持ちの方が強いですね。今後、どんどん弾き込んで、表現をさらに豊かにしていきます。一方で、ベートーヴェン研究が進んでいて、新たな改訂楽譜も出版されていますので、それも反映して…。こんどの大阪の演奏会は、先の東京と違った表現になるかもしれません」

（取材・記事　大阪新音）

©武藤章

■ 長谷川　陽子（はせがわ・ようこ）

色彩豊かな音色と音楽性を持ち合わせた、日本を代表するチェロ奏者の一人として活躍しています。2022年、デビュー35周年を迎えました。

桐朋学園大学付属「子供のための音楽教室」で井上頼豊氏に師事。1987年にリサイタル・デビューし、翌88年には小林研一郎指揮／日本フィルで協奏曲デビューしました。桐朋学園音楽大学を経てシベリウス・アカデミー（フィンランド）に留学、アルト・ノラス氏に師事し、1992年首席で卒業しました。

これまでNHK交響楽団、プラハ交響楽団ほか、国内外の多くのオーケストラと共演しています。また、日本各地でのソロ・リサイタルや無伴奏リサイタル、室内楽奏者として多くのコンサートに出演し、幅広い支持を得ています。NHK-Eテレ「ららら♪クラシック」や、ラジオのパーソナリティなども務めました。

アリオン賞審査員奨励賞、松村賞、霧島国際音楽祭賞、ロストロポーヴィチ国際コンクール特別賞、モービル音楽賞奨励賞、新日鉄音楽賞フレッシュ・アーティスト賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞など、受賞多数。

現在、桐朋学園大学音楽学部准教授を務めています。

２０２２年は、私にとってデビー35周年の年だった。
この節目にベートーヴェンのソナタ全曲に臨みたいと考えた。
ベートーヴェンの音楽の本質とは何だろう。
コロナ禍のこの数年、ベートーヴェンが残した作品に触れながら
考えを巡らせるのは、幸せな時間だ。
この問いの答えはまだでていない。けれど、今現在の私が考える
ベートーヴェンの本質は潔さ、迷いのない力強さ、誠実さ・・・
この３つの要素を強く感じる。
ふと思う。人間として、音楽家として、そのように生きてゆきたい。
チェロ・ソナタ全曲に取り組むことで
ベートーヴェンへの憧れを、みなさまと共有したい。
応援してくださるお客様と、
支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちとともに。

長谷川陽子

プログラム・メモ

ベートーヴェン（１７７０～１８２７）のチェロ・ソナタは全部で５曲です。１７９６年から１８１５年の間に作曲されました。それぞれからベートーヴェンの生きざまも読み取ることができます。

▼チェロ・ソナタ第１番 ヘ長調 作品５の１
▼チェロ・ソナタ第２番 ト短調 作品５の２

両曲はベートーヴェンが26歳の、１７９６年半ばに作曲されました。プラハからベルリンにかけての長期演奏旅行中に、当時のプロイセン王フリードリヒ・ウィルヘルム２世の御前演奏で初演され、同王に献呈されました。どちらの曲も２楽章構成です。また、ベートーヴェンがピアニストとして名声を得ていただけに、ピアノ・パートがひじょうに技巧的に書かれています。「チェロ・ソナタというよりも、チェロの伴奏によるピアノ曲」であるといわれるゆえんです。

演奏時間はどちらも約25分です。

▼チェロ・ソナタ第３番 イ長調 作品69

古今のチェロ・ソナタの中でも最高傑作と賞される曲です。ベートーヴェン中期の、「傑作の森」（ロマン・ロランの言葉）の真っただ中の、１８０８年頃（38歳の頃）に作曲されました。ベートーヴェンの５曲のチェロ・ソナタの中で最も明快、ドラマッチックかつ優しさがあふれている曲です。歴史的に初めてチェロがピアノと同格に扱われたと評価されているように、朗々と歌うチェロと小気味よいピアノの対応で曲が進行します。この曲は３楽章で構成されています。演奏時間約27分。

▼チェロ・ソナタ第４番 ハ短調 作品102の１
▼チェロ・ソナタ第５番 ニ長調 作品102の２

第４番・５番は、第３番から７年後の１８１５年の春から夏にかけ、続けて作曲されました。ベートーヴェンは45歳になっていました。ベートーヴェンは１８１２年頃から病気がちで、家族問題もかかえて作曲活動は停滞ぎみでした。それでもバッハの楽曲研究などに努めます。やがて創作意欲を取り戻し、荘厳ミサ（１８２３）や第九交響曲（１８２４）などの大曲を世に送り出します。第４番・５番の作曲時期は、その復調の頃で、中期から後期への転換期に当たります

第４番は、それまでのチェロ・ソナタと異なり、幻想的かつ内省的な作風になっています。楽章構成も変わっていて、５つの部分から成る単一楽章、または途中の休符で分かれる２楽章形式ともされています。したがって演奏時間は短く、約14分です。

第５番もまた簡潔な小品です。ピアノ・ソナタ第31番と同様に、バッハのフーガ技法を取り入れており、チェロ・ソナタ５曲で唯一、緩徐楽章を使用するなど、後のロマン派音楽につながる自由な創意を加えています。３楽章構成ですが、第２楽章と第３楽章は切れ目なく演奏されます。演奏時間は約20分です。

■ ピアノ

松本 和将（まつもと・かずまさ）

©Takafumi Yamanishi

岡山県倉敷市生まれ。

高校在学中の1997年、ホロヴィッツ記念国際ピアノコンクール（ウクライナ）で第３位入賞、東京芸術大学在学中（１年生、19歳）の1998年には第67回日本音楽コンクールに優勝、併せて増沢賞はじめ全賞を受賞しました。

2001年 第53回ブゾーニ国際ピアノコンクール（イタリア）第４位、2003年には世界三大コンクールの一つ、エリザベート王妃国際音楽コンクール（ベルギー）でも第５位に入賞するなど世界で高く評価されています。

ベートーヴェンなどのドイツものと、ショパンを得意とし、2016年からリサイタルシリーズ「松本和将の世界音楽遺産」に取り組んでいます。国内では主要オーケストラや前橋汀子・漆原啓子・長谷川陽子ら、多くの演奏家・団体と共演しています。

現在、ベルリン芸術大学大学院に在籍しています。